



私が、39歳になって初めて出版した本は「空間の生態学」(小学館1976年刊)で、翌年の1977年、40歳になって、「都市に生きる方途—応用生態学の構想」をNHKブックスから出版した。とりわけ、私の思い出の多いのは、それから10年後、50歳になって書いた「都市は、野生でよみがえる」(学芸出版社1986年刊)だ。

望んで独立したのではなく、行きがかり上、造園設計会社を立ち上げる羽目になった1968年から、数えて今年で41年目になる。造園関連の仕事はずいぶん多くこなしてきたが、仕事と並行して、それらの関連する様々な想いを、できるだけ本として出版するように心がけてきた。単なる作品集ではなく、クライアントからの注文で達成できなかったことや、仕事のもつ本質的な意味などを記述した本を出版することによって、造園という分野が目指す方向を訴えてきた。すでに単著だけで11冊になった。

この11冊の本を振り返ってみると、「都市は、野生でよみがえる」に初めて登場する「野生」という言葉が、私の作品、仕事のキーワードになっていることがわかる。造園は大自然を背景に様々な仕事をする。そのなかで忘れてならないことは、自然のもつ「野生」である。その思いは、この年になっても変わらないが、まだ、突き詰めたわけではない。

私にとって、本を書くことは、恥をかくことでもあるが、自分をさらけ出すことで、学ぶことは多く、苦行であると同時に、楽しい思い出でもある。

あまりにも本の執筆に熱中して、自分が設計会社の社長であることを忘れ、本を出版した年の前後は、仕事が激減し、会社経営を危うくすることが、しばしばであった。私にとって、本を書くことは、麻薬に手を染めるのと同じであった。仕事の打ち合わせに行く時、カバンのほかに、原稿用紙とノリとはさみを入れた大きな紙袋を持ち歩いた。寸暇を盗んで、だれからも居場所が分からないように一人で喫茶店に入りこみ、そこで執筆した。本の執筆と仕事の両立は困難を極め、いつの間にかタバコは、1日5箱を越えるようになっていた。環境の仕事をしているのに、私は、自分のタバコの煙りで燻されていた。タバコで命を落とす寸前に、禁煙に成功し、現在、健康な日常を送っている。

吉村 元男
造園家



【経歴】地球ネットワーク会議代表、
鳥取環境大学環境デザイン学科教授を経て、
現在、(株)環境事業計画研究所会長。